

気質・性格特性とアサーション，ハーディネスとの関連

15013PCM 馬淵 真衣

I. 問題

大学生には，さまざまな領域において，幅広い対人関係の形成・維持が求められるが，社会的スキルの不十分さにより，対人関係の希薄化が問題視されている(岡田，1995；廣岡・廣岡，2002；菊浦・吉岡，2010)。うまく自己表現できないことによって，日常的なストレスのなかでも，対人関係上のストレスが比較的大きな割合を占めている(加藤，2001)。そのため，対人関係を円滑にし，ストレスにうまく対処できるアサーション(assertion)を身につけることが求められる(菅沼，1994；関口・三浦・岡安，2011)。適切な自己表現に関わるアサーティブな考え方は，エリスの理論(Ellis & Harper, 1975 國分・伊藤訳 1981)における信念や思い込みに該当する(平木，2009)。そのため，信念や思い込みの形成に関わると予想されるパーソナリティ(personality)がアサーションの発現に関連すると考えられる。パーソナリティの概念に関して，気質 4 次元(新奇性探求，損害回避，報酬依存，固執)と性格 3 次元(自己志向性，協調性，自己超越性)から構成される Cloninger の 7 次元モデル(Cloninger, Svrakic, & Przybeck, 1993)が存在する。これは実際のパーソナリティの振る舞いに近い構成体を導くために，個々の特性だけでなく，8 つのパーソナリティタイプ(神経質，激情家，情熱家，冒険家，慎重，論理的，素直，独立)に分類して人の行動特徴を複合的に検討できるモデルである。Big Five モデルとアサーションおよび Cloninger の 7 次元モデルとの関連(玉瀬・岩室，2004；国里・山口・鈴木，2008)をふまえて，対人関係上の問題を発生させず，他者とよりよく付き合うことを求める傾向にあると，アサーティブに行動する傾向が高くなると考えられる。

大学生は社会的スキルだけでなく，ストレス

への対処方略を適切に身につけることも求められる。玉瀬・角野(2005)によると，問題解決行動としてアサーティブな態度をとることは，相手との間に葛藤が生じ，短期的にはストレスになりうることが示唆された。エリスの理論(Ellis & Harper, 1975 國分・伊藤訳 1981)にもとづくと，パーソナリティによって，アサーション後の物事の受けとめ方が変化し，ストレスfulな現状に柔軟に対応していける性格特性に該当するハーディネス(hardiness)の向上にパーソナリティが影響を与えると考えられる(小坂，1992)。また，それぞれパーソナリティとの関連が予想される，アサーションとハーディネスとの関連については，アサーションとストレス反応との関連(金子他，2010；堀・宮本，2013)をふまえて，アサーションが高くなると，ストレス反応への柔軟な対処を促すと考えられる。

II. 目的と仮説

パーソナリティ特性とアサーションの発現およびハーディネス向上との関連を検討することを目的とし，以下の仮説を立てた。「アサーション行動の発現とパーソナリティとの間に関連がみられ，パーソナリティの中でも，損害回避，報酬依存が高くなると，アサーションが高くなると予想される。パーソナリティタイプにおいては，損害回避，報酬依存が高い神経質と慎重が，他のタイプよりもアサーションが高くなると予想される(仮説 1)」，「ハーディネスとパーソナリティとの間に関連がみられ，パーソナリティの中でも，損害回避が高くなると，ハーディネスが低くなると予想される。また，新奇性探究，報酬依存，自己志向性，協調性，自己超越性が高くなると，ハーディネスが高くなると予想される。そのため，パーソナリティタイプにおいては，新奇性探究および報酬依存が高く，損害回避が低い情熱家が，最もハーディネスが

高くなると予想される(仮説 2)、「アサーションとハーディネスとの間に関連がみられ、アサーションが高くなると、全てのハーディネス特性が高くなると予想される。(仮説 3)」

Ⅲ. 方法

調査協力者：愛知県内の私立 A 大学の学生 200 名を対象に質問紙調査を実施し、記入に不備のある者を除き、計 186 名を分析対象とした(男性 36 名、女性 150 名、平均年齢 19.80 歳、SD=1.390)。

調査手続き：2016 年 6 月 24 日の講義時間内に質問紙を一式にしたものを配布し、集団的に調査を実施した。

質問紙の構成：TCI の日本語版(木島他, 1996)の短縮版、15 項目簡易版ハーディネス尺度(森・東條・佐々木, 2005)、青年用アサーション尺度(玉瀬・越智・才能・石川, 2001)、フェイスシートから構成された。

Ⅳ. 結果

気質・性格特性がハーディネスおよびアサーションに及ぼす影響を検討するため、それぞれ共分散構造分析を行った。また、気質 8 タイプの検討をするため、ハーディネス、アサーションについて、一元配置分散分析をそれぞれ行った。その結果、まず、アサーションとパーソナリティとの関連については、損害回避および報酬依存が高くなると、アサーションが高くなることが示された。タイプごとに関連を検討した結果、神経質と情熱家は、ともに独立、冒険家にくらべて有意にアサーションが高くなったが、慎重との有意な関連が示されなかったため、仮説 1 は一部支持されなかった。次に、ハーディネスとパーソナリティとの関連については、新奇性探究の下位概念である探求心と固執から成る意欲的努力、自己超越性が高くなると、ハーディネスが高くなることが示された。しかし、報酬依存および協調性は、どのハーディネス特性とも有意な関連を示さず、損害回避が高くなると、コミットメントとチャレンジが高くなることが示されたため、仮説 2 は一部支持されなかった。そして、アサーションとハーディネスとの関連については、アサーションが高くなる

と、コミットメントおよびチャレンジが高くなることが示されたが、アサーションとコントロールの間には有意な関連が示されなかったため、仮説 3 は一部支持されなかった。

Ⅴ. 考察

ハーディネスとパーソナリティとの関連において、報酬依存および協調性がどのハーディネス特性とも有意な関連を示されなかったことについては以下のように考えられる。志賀他(1999)によると、協調性が高くなると、周囲と融合することによって、できるだけ自分の秩序から逸脱せず、ストレスの少ない生活を送ろうとする傾向にあることが示されている。さらに、志賀他(1999)と田中(2006)は、協調性の高さが抑うつを低減させることを報告している。つまり、報酬依存および協調性が高くなると、ストレス状況に陥っても、問題解決のために主体的に行動せず、他者と一緒にいることによって、ストレス反応を緩和させるのではないかと。また、損害回避が高くなると、コミットメントとチャレンジが高くなることが示されたことについては、問題が発生することを想定し、仮に困難な状況に陥ったとしても、ストレス反応を増やさないようにするために、自分で決めたリラックス方法に熱心に取り組むなど、予防行動をとるという可能性が考えられる。アサーションとハーディネスとの関連において、アサーションとコントロールの間に有意な関連が示されなかったことについては以下のように考えられる。玉瀬・馬場(2003)、玉瀬・岩室(2004)によると、アサーティブな態度をとることは、相手との間に葛藤が生じ、短期的にはストレスとなる可能性があり、対人場面によっては、アサーション行動はいつも受け入れられるとは限らないことを報告している。そのため、問題解決のために、自分の意見を発言することが、必ずしも意義があるとは捉えられないことにより、アサーションとコントロールとの間に有意な関連がみられなかったのではないかと。今後は、それぞれの特性の関連がストレス反応の生起に及ぼす影響を検討するために、抑うつに関する尺度も使用すべきであると考えられる。